
ある亀のうた

青梅ゆかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある亀のうた

【コード】

N8865P

【作者名】

青梅ゆかり

【あらすじ】

ひとりぼっちのある亀は山頂までの競走を持ちかけられて・・・
(本当は、追って追われて走るより、ともに並んで歩みたい。)
昔話をベースに、淡い恋を描いた詩です。

(前書き)

長い長い間、大切な人を待ち続けた亀のお話。
のどかで、少し切ない時間の流れを書いてみました。

草の香りと風の音「もしもし亀よ亀さんよ」
突然声をかけられた「競争しようあの山へ」

（追って追われて走るより

ほんとは並んで歩みたい）

心の声を飲み込んでそれと同時にうなずいた
閉じた目蓋まぶたの奥の闇 遠い記憶がよみがえる
磯の香りと波の音「やあやあ亀よ痛かるう」

乾いた空砲 目を開ける

火薬の匂いが風に散り もう隣には誰もない
白い背中が遠ざかる 白い背中に息を吐く
ふと思いつく海の色 そして聞こえるの声
いつかも飲んだ言葉があった
白い姿が滲み出す

（なぜ開けたのかその箱を）

（どうしてそんなに急ぐのか）

そうしてあなたはいつだって
私を置いていなくなる

昔々の白浜で 禁忌の箱がきました

若かりし膚はだも皺みぬ 黒かりし髪も白けぬ

私はぼつり海の底 たった一人で待ちました

一人で歩む長い道 一人に慣れた長い道

もうどのくらい来ただろう

夏の匂いが漂う木陰 白い背中が伸びていた
かすかに聞こえたあなたの寝息

頬で受け止め 行き過ぎる
やっぱりあなただったのか
ようやくあなたに追いついた

季節が何度も通り過ぎ

気付けばゴール山の上

白い頭がふもとに見える

嬉しさ紡げば言葉になった

「ゆっくりここまで来てください」

「ゆっくり一緒に歩きましょう」

白い背中は亀に乗り

(後書き)

幼い頃読んでいた大好きな昔話。海の底で待ち続ける人に幸せがくることを祈りつつ書きました。いかがだったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8865p/>

ある亀のうた

2011年1月8日23時09分発行